

同窓生シリーズ

(28)



第34回生 潮 智史氏

昭和39年 福岡県大牟田市生まれ
昭和57年 本校卒業
昭和62年 筑波大学体育専門学群卒業、朝日新聞社入社
宇都宮支局、運動部を経て、平成7年4月から社会部記者

属していた企業教社から選手としての誘いもありましたが、四年になっても進みたい方向を見つけれないでいました。そんな中

でもいいのです。ひとつでいいから、「これだけは誰にも負けないぞ」と思えるものが持てるかどうか。振り返れば、サッカーという「個性」を見つけた私の高校時代は幸せだったといえるかもしれません。

同世代の両者は一見、対照的です。険しい表情で、取り囲む記者から逃げるように走り去っていく信者。時間を持て余したやじ馬の若者たちは、服装も派手でたばこを片手に何時間も座り込んでいます。

見ていて、ふと気付いたのです。総本部のビルと歩道の間には大きな隔たりがあるようで、実は紙一重なのではないか。ビルの中にいる信者と歩道に座り込む若者が、立場を入れ替えていた可能性は十分にあったのではないかと。

少なくとも、彼らは同じ時代を生きてきました。同じ価値観や不安感を抱いていた若者が、一方で本質を見極めることができないうちに宗教団体の教えにはまり込んでいき、一方では自分が何をしたいのか分からないまま徒党を組んで街をうろついている。

「かつこいいから、それだけでいいじゃん」。一連の事件の捜査が進む中、教団の上祐幹部見たさに総本部に来ていた女子高生の言葉が耳に残っています。

巡り巡って、新聞記者になり、九年目になりました。私の高校生時代を知る先生方や友人は、おそらく「あいつが？」とびんとこないでしょう。勉強はしない。文章がうまいわけではない。特別、正義感が強かったわけでもない。「記者になりました」と口にしたことももちろんない。将来、何になりたいかも分からないでいた高校三年間だったからです。

しかし、巡り合わせと不思議なものです。そのもそのきつかけは、高校時代に唯一自信の持っていたサッカーでした。都大会に出てもせいぜい一回戦負け。それでも年間六十試合をこなし、練習だけはやたらと厳しい部活動でした。おかげで、もつと高いレベルでやってみたいと、筑波大学のサッカー部を二度にわたって「受験」しました。母親は、浪人してまで体育の学部を受けることを快く思いませんでした。

が、「将来、保健体育の教師になりたい」というウソを貫き通しました。大学では運良く、三年の途中からレギュラーに。当時日本リーグに所属していた企業教社から選手としての誘いもありましたが、四年になっても進みたい方向を見つけれないでいました。そんな中

今年の四月、スポーツ担当から社会部に移ったとき、世の中はまさにオウム一色でした。上九一色村にも一週間泊まり込み、ワイドショーで連日中継された南青山の教団総本部にも何度となく張り付きました。なかでも最も印象深く残っているのは、総本部前の若者たちの姿です。

総本部の五階建てのビルには、朝から夜中まで二十歳前後の信者が大勢、出入りしています。その一方で、総本部前の歩道には、同じ年頃の若者たちがやじ馬に集まっ

ています。週末の夜中ともなれば、取り巻きの若者たちの間を、総本部から出て来た信者が擦り抜けるように出ていきま

そんな情景を何げなく